

### もう一度初めから その4

室生犀星の「小景異情」は、「故郷は遠きにありて思うもの」という第二節が有名ですが、この詩の最後の第六節をここに記したいと思います。

「小景異情」 (室生 犀星)

その一

白魚はさびしや  
そのくろき瞳はなんといふ  
なんといふしをらしさぞよ  
そとにひる餉(げ)をしたたむる  
わがよそよそしさと  
かなしさと  
ききともなやな雀しば啼けり

その二

ふるさとは遠きにありて思ふもの  
そして悲しくうたふもの  
よしや  
うらぶれて異土の乞食(かたみ) となるとても  
帰るところにあるまじや  
ひとり都のゆふぐれに  
ふるさとおもひ涙ぐむ  
そのころもて  
遠きみやこにかへらばや  
遠きみやこにかへらばや

その三

銀の時計をうしなへる  
ころろかなしや  
ちよろちよろ川の橋の上  
橋にもたれて泣いてをり

その四

わが霊のなかより  
緑もえいで  
なにごとしなけれど  
懺悔の涙せきあぐる  
しづかに土を掘りいでて  
ざんげの涙せきあぐる

その五

なににこがれて書くうたぞ  
一時にひらくうめすもも  
すももの蒼さ身にあびて  
田舎暮しのやすらかさ  
けふも母ぢやに叱られて  
すもものしたに身をよせぬ

その六

あんずよ  
花着け  
地ぞ早やに輝やけ  
あんずよ花着け  
あんずよ燃えよ  
ああ あんずよ花着け

故郷を思い、その情が抑えがたいものとなった時に、ほとぼしる言葉は、故郷を象徴するあんずの花でありました。

さながら、私の最後の言葉は、この言葉を借りてこのようになるでしょう。

**磐城よ**

**花咲け**

**地ぞ早やに輝やけ**

**磐城よ花咲け**

**磐城よ燃えよ**

**ああ 磐城よ花咲け**

**磐城よ 永遠に輝け**

**心から祈る 磐城よ 母校磐城よ 磐城の人々よ**

**どこまでもいつまでも永遠に輝く希望の星となれ**